

社会的な判断を高める社会科学習 ～「つくり出す活動Ⅱ」を重視した活動構成～

Social studies learning to raise a social judgment
～ The activity constitution that attached great importance to “activity Ⅱ to create” ～

藤岡太郎

Taro FUJIOKA

(福岡教育大学附属福岡小学校)

(平成27年9月30日受理)

要 約

小学校社会科の究極のねらいは、公民的資質の基礎の育成である。本研究では特に、公民的資質の構成要素である多面的で公正に判断する力の育成を目指した。そこで、第4学年「走れ！路面電車～福岡に路線をつくった渡辺与八郎～」(先人の働き)の単元において、学習問題に対する追究の視点が同質な小集団や異質な小集団を形成して、社会的事象をつくり出した当事者の苦心や働き、願いを追究し合う実践検証を行った。その結果、資料から読み取った事実と事実、自他の考えを相互に比べたり、関連付けたりしながら話し合うことで、福岡の発展に尽くした当事者の営みの意味や自分たちの生活とのつながりを多面的・総合的に判断することができた。

キーワード：社会的な判断, 社会科学習, つくり出す活動, 多面的・総合的, 学び合い

I はじめに

社会科のねらいは、子供たちが社会認識を深め、社会的な見方や考え方を成長させることである。それは、社会的な事象について調べたことや考えたことをもとに話し合う活動によって求めてきた。しかし、これまでの指導上の反省から、子供一人ひとりに資料の読み取りや調べ活動の内容のばらつきが原因で、話し合い活動が噛み合わなかったり話し合いを好む子供の一方的な発言で学習が進んだりする課題があった。

そこで、本研究では、学習問題に対して、子供一人ひとりにしっかりと考えをもたせた上で、話し合いの際に、追究の視点が同質な小集団や異質な小集団を形成し、多様な視点から判断の根拠となる事実を比べさせることで、社会的な事象がもつ特色や関連、意味の認識の高まりを目指した。

II 研究主題の説明

1 社会的な判断を高める社会科学習

社会的な判断とは、見学や調査、資料をもとに、地域社会の社会的な事象の特色や相互の関連、意味をとらえることである。

2 社会的な判断を高める社会科学習

社会的な判断を高める社会科学習とは、多様な追究の視点をもつ他者との追究により、判断の根拠となる事実を加えたり、結び付けたりしながら判断を強め、

地域社会の一員としての自覚や誇り、愛情を深めていく子供を育てる学習構想である。

本研究では、中学年の児童を対象に、以下のよ姿を目指していく。

- 多様な追究の視点をもつ他者との追究し、社会的な見方や考え方、表現を高め、地域社会の特色を生み出す人々の行為の意味を判断する視点を見出すことができる。
- 地域社会の特色を生み出す人々の行為の意味を、願いと営み、目的と手段の関係で見たり、自他の考えを相互に比べて考えたりすることができる。
- 地域社会における社会的な事象の意味や相互の関連をとらえ、地域社会の一員としての自覚や、地域社会に対する誇りと愛情をもつことができる。

III 研究副主題の説明

1 つくり出す活動

ここでいう「つくり出す活動」とは、導入段階で、地域社会の事象を支える人の営みに迫る学習問題や追究の視点を見出す活動、展開段階で、他者との追究により、事象を支える人の行為の意味を見出す活動、発展段階で、これからの自分と社会とのかかわりを見出す活動のことである。さらに、「つくり出す活動」は、「表

現」「交流」「再表現」の3つで構成し、以下のような内容をもつ。

表現	事象の観察や調査、資料の読み取りをもとにつくった考えを出し合う。
交流	友達と考えを比較・検討し、判断の根拠となる事実を比べ合う。
再表現	交流の結果をもとに、付加・修正を加え、価値的な考えと高め合う。

2 「つくり出す活動Ⅱ」を重視した活動構成

導入段階では、人々の思いや願いに着目する資料提示や予想の分類により、社会的事象に対する驚きや疑問を学習問題に深化させ、追究の視点を明確にする「つくり出す活動Ⅰ」を設定する。次に、展開段階では、人の営みに着目する資料提示や考えの比較・検討の場の設定により、学習問題を強化する視点を見出し、判断する「つくり出す活動Ⅱ」を設定する。そして、発展段階では、自分と社会とのかかわりに着目する資料提示により、これからの自分と社会とのかかわりを見出す「つくり出す活動Ⅲ」を設定する。

「つくり出す活動Ⅱ」を重視した活動構成とは、特に、展開段階における「つくり出す活動Ⅱ」において、学習問題に対する予想が同じ子供の小集団（同質）及び追究対象が同じ小集団を編制し、交流活動の場を設定することである（図1）。

チームによる「つくり出す活動Ⅱ」を重視した活動構成			
	導入	展開	発展
学習活動	○ 社会的事象に出会い、学習問題や学習問題に対する予想や計画を話し合う。 つくり出す活動Ⅰ	○ 学習問題について調べ、追究内容や資料をもとに、友達と学習問題について話し合う。 つくり出す活動Ⅱ	○ これからの自分と社会とのかかわりを話し合う。 つくり出す活動Ⅲ
表現	驚きや疑問の表出	学習問題に対する判断の表出	社会とのかかわりの表出
交流	学習問題への深化	学習問題に対する判断の根拠の比べ合い	視点による社会とのかかわりの吟味
再表現	追究の視点を判断	学習問題に対する最終的な判断	社会とのかかわりを判断
手だて	※ 人の思いや願いに着目する資料の比較提示 ※ 追究の視点による予想の分類	※ 人の営みの意味に着目する資料提示 ※ チームと全体交流による判断の比較・検討の場	※ 自分と社会とのかかわりに着目する資料提示

図1 つくり出す活動の構成

IV 研究の構想

1 教材化の工夫

子供に、社会的な判断を高める力を育むための教材を以下の3つの視点から選定する。

○ よりよい地域の実現に向けた人が存在し、直接話を聞くなどの追究ができること
--

○ 事象を支える人が他者と協同して問題解決を図っている社会的事象が存在すること
○ 集団での話し合いによって、事象の特色や関連、意味を見出すことができること

教材化においては、地域の社会的事象を支える人々の組織的、協働的な活動を体験できるような事象を取り上げることによって、子供たちの学び合いを必然的なものになると考える。

2 社会的な判断を高めるチーム活動の構成

学習問題に対して、追究の視点に沿った調査や資料収集の場を設定する。そして、視点に応じた小集団を形成し、交流活動を設定する。

具体的には、まず、子供に追究の視点をもとに、学習問題について調べさせ、考えをつくらせた上で、追究の視点と同じ子供で、小集団を編制する。これを同質チームと呼ぶ。そして、同質チームで、相互に、資料をもとにした判断の出し合い、事実の比べ合いの活動を行い、判断の根拠となる事実の付加をねらう。次に、同質チームを解体して、視点が異なる子供を交えた異質チームを編制し、相互に判断の出し合い、事実の比べ合いの活動を行い、視点の広がりによる判断の強化をねらう。この時に、ボードを活用して、事象相互の関係について矢印や線で結ばせたり、キーワードを記述させたりする。最後に、代表児童の説明をもとに、全体で話し合う活動を行う。（図2）。

つくり出す活動Ⅱの活動構成		
	同質チームの交流	異質チームの交流
ねらい	○ 判断の根拠となる事実の付加	○ 視点の広がりによる判断の強化
表現	○ 資料をもとにした判断の出し合い	○ 付加・修正した判断の出し合い
交流	○ 事実の比べ合い	○ 事実の比べ合い
再表現	○ 判断の付加・修正	○ 判断の強化

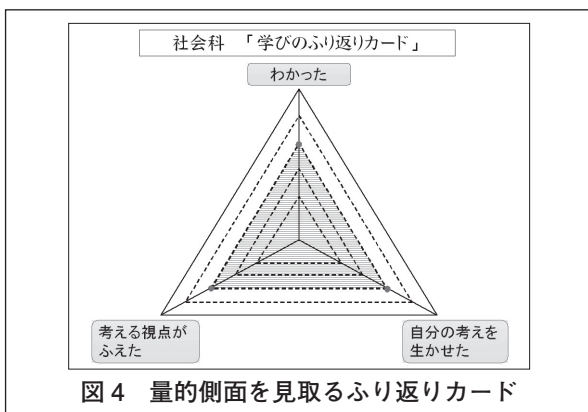
図2 展開段階におけるつくり出す活動Ⅱの構成

3 評価の工夫

学びの過程や成果を形成的・総括的に評価する。子供の自己評価を尊重しながら、子供同士の相互評価や教師の評価なども加える。「学びのふり返しカード」は、記述による質的な側面（図3）と、量的な側面（図4）から、毎時間記述させる。

社会科 「学びのふり返しカード」 月 日 () 「単元名」 年 組 名前 ()	
今日の社会科の 学習で	
<input type="radio"/> わかったこと <input type="radio"/> できたこと	
学び合いで 見つけた 自分の考え方や 友達の考え方の よさ	

図3 質的側面を見取るふり返しカード



学習問題 なぜ、与八郎さんは、福岡(天神)に、
しゅんかん線をつくったのだろう。おと かつ線があった。
資料1 A児が設定した学習問題

学習問題に対する予想 与八郎さんはきっと福岡を登りさる
ためにつくった。だって、博多駅と博多港をつなげている
から、荷物とかいっぱい運ぶのよにしたいと考えた。
資料2 A児の学習問題に対する予想

導入段階では、渡辺与八郎が敷いた循環線の路線図を読み取り、与八郎の行為の意味に迫る学習問題を設定し、学習問題に対する予想（追究の視点）をもつことをねらいとしている。そのために、与八郎が循環線を敷く前に、既に福岡に存在した東西に延びる路線図（貫通線）と福岡を南北に循環する路線図（循環線）の比較提示と、循環線をつくる上で、市民の反対に苦心したという事実を提示し、つくり出す活動Ⅰを設定した。A児は、市民の反対に遭ってまでも福岡に循環線をつくらうとした行為に疑問をもち、学習問題を設定した（資料1）。

さらに、循環線沿いにある施設（駅や港、建物）に着目させ、学習問題に対して予想させた。すると、A児は、博多駅と博多港を結んでいることに着目し、「輸送」という視点から予想をつくることができた（資料2）。（考察1）

与八郎が循環線をつくった意味に迫る学習問題の設定と、追究の視点をもたせる上で、貫通線と循環線の路線図の比較提示や苦心を感じ取らせる資料提示をもとに、「つくり出す活動Ⅰ」を設定したことが有効であったと考える。それは、資料2のように路線図が示す施設相互の位置関係に着目させたことが上手く働いていたからである。しかし、具体的な調査や観察の場の設定については課題が残った。

展開段階：3～6 / 7時

与八郎が循環線をつくる前と後の社会や人々の生活の変化を調べ、学習問題の応えについて話し合う。
（つくり出す活動Ⅱ）

展開段階では、与八郎が循環線をした意味について、資料をもとに、与八郎の願いと社会の変化や福岡の産業の発展を関係付けてとらえることをねらいとしている。そのために、まず、与八郎が循環線をつくった後の社会の変化に関する資料を提示し、学習問題に対する判断を書き表す場を設定した。A児は、人口の増加や福岡市の税収入の変化と循環線が博多駅と港をつないでいる地理的条件を関係付けて判断した（資料3）。

そこで、輸送や交通の利便性、循環線の地理的条件などに着目している子供たちを小集団化したチームを

V 指導の実際

1 単元名

第4学年 走れ！路面電車

～福岡に路線をつくった渡辺与八郎～

2 本単元の目標

- 学習問題に対する多様な追究の視点を結び付けて、事象の特色や意味に対する判断を再構成することができる。
- 与八郎の行為の意味を願いと営み、目的と手段などの関係で見たり、視点を付加・修正して考えたりすることができる。
- 与八郎の働きを人々の生活の向上や福岡の産業の発展と関係付けてとらえ、福岡に対する誇りと愛情をもつことができる。

3 指導の実際と考察

時導入段階：1～2 / 7時

福岡市の交通の変遷に伴う社会や地域の人々のくらしの移り変わりをもとに、与八郎の行為の意味に迫る学習問題について話し合い、学習問題に対して予想し、追究の視点をつくる。**（つくり出す活動Ⅰ）**

学習問題に対する考え①
 この資料を見てください。じゅんかん線をずる前とつた後で、人口が2倍(9対)で、福岡市の利便さもふえています。つた、駅や港をつなぐと人や荷物がたくさん運べるし、集まるので、便利になり福岡が発展すると考えたからだと思います。商店もふえているから。

資料3 A児の学習問題に対する判断①



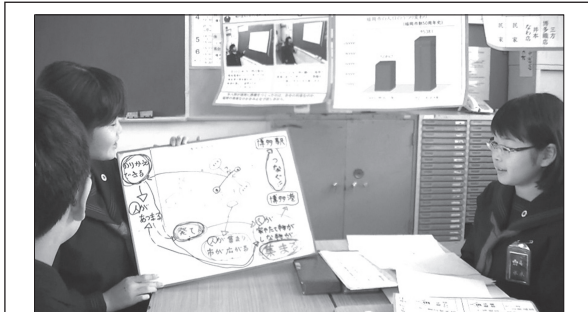
A児

与八郎が循環線をつかったのは福岡の発展のため。博多駅と博多港をつないで人や荷物を集めたんだ。だから、人口や商店が増えたんだ。

B児

私も、与八郎が循環線をつかったのは福岡の発展のため。博多駅と港を回って、人や品物を運ぶから、周りに店が増えたんだよ。

資料4 同質の小集団での話し合いの様子



A児

与八郎の循環線は、博多駅と博多港をつないで人や荷物を集めることで、人や商店を増やし、福岡の発展を考えたと思う。

B児

ちょっといいですか。貫通線と循環線がを交差させて、乗り換えできるようにしたよね。これも、人や物を集める工夫だよ。

A児

なるほど。人や物を集中させたんだ。

資料5 異質の小集団での話し合いの様子

編制し、「つくり出す活動Ⅱ」を設定した。A児たちは、「輸送」の視点から追究し、自分の判断と根拠となる事実を出し合い、比べ合いながら、社会の変化と関係付けて、循環線の意味を判断した(資料4)。

さらに、判断の強化をねらい、追究の視点が異なる



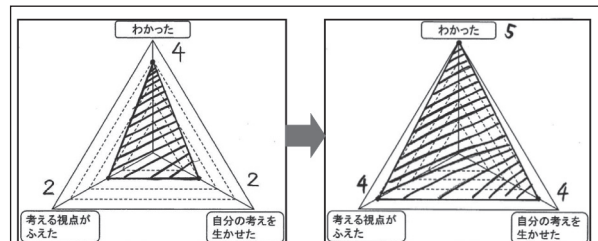
A児

与八郎は、貫通線と違って、博多駅と博多港をつないで多くの人と物を集めることに加えて、乗り換えできるようにして、さらに人を集中させることで、福岡の発展を考えたと思います。

資料6 A児の学習問題に対する最終判断

今日の社会科の学習で	与八郎さんは、福岡の発展のことを考えて、じゅんかん線をつかったこと。その中で、天神を中心に人口や品物を集めていたこと。博多駅や博多港をつなぐこと、前にあつたかんづねと天神でのりかえる駅をつかったことがよかったとおもつた。
○わかったこと ○できたこと	
学び合いで見つけた自分の考え方や友達の考え方のよさ	わたしは、博多駅と博多港をつなぐと、たくさんの人と品物を運ぶのに集まりやすくなるのが福岡の発展につながるかと考えていて、この考えはOKでした。でも、大橋さんが「かりかえ、かできるようにしたことを忘れたので、これも人や品物がたくさん集まることにつながると思ったので、チーム(ちび)で話し合つてよかったと思った。だから、みんなの前でもおわりやすく言つてよかった。

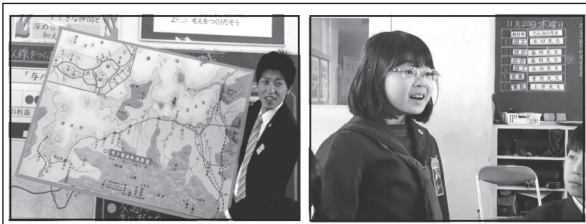
資料7 交流後のA児の自己評価



資料8 A児の自己評価の変容

子供を小集団化し、話し合わせた。するとA児は、B児が発言した、乗り換えという「交通の利便性」の視点からの事実を自分の判断に付加して(資料5)、循環線の意味をとらえることができた(資料6)。(考察2)

与八郎がつくった循環線の意味を判断させる上で、「つくり出す活動Ⅱ」を設定したことが有効であったと考える。これは、視点が同質のチームによる追究と異質のチームによる追究を設定したことが有効に働いたからである。資料6に見られるように循環線の意味を与八郎の目的と手段の関係から考え、自分の判断を再構成してとらえる姿が見られた。さらに、資料7の交流後の自己評価から、追究の視点が異なる小集団で話し合わせた結果、A児が友だちの考えと自分の考えを結び付けて、最終的な判断をすることができた学び合



与八郎さんは、じゅんかん線をつくるだけじゃなくて、じゅんかん線をはいていうとした。でも、与八郎さんが生きてる間には実現しなかったけど、今の地下鉄線とか大井線になってるので、福岡の交通は、べりになった。与八郎さんのおかげです。だから西鉄バスとか地下鉄とか感懐してのりたいと思う。

資料9 A児の自分と社会とのかかわり

この価値を実感していることが読み取れる。資料8の自己評価の変容から、視点の異なる小集団を形成して話し合わせたことが有効に働いたことが読み取れる。

発展段階：7 / 7時

与八郎の「幻の循環線」の資料や、与八郎の生き方を感動的に描いたVTRを視聴し、自分と社会とのかかわりについて話し合う。

発展段階では、与八郎のこれからの自分と社会とのかかわりを判断することをねらいとしている。そのために、与八郎が構想していた「幻の循環線」の資料や生き方を資料を提示し、「つくり出す活動Ⅲ」を設定した。A児は、与八郎の働きと、自分が利用する公共の交通機関の利便性とを結び付けて考え、判断した(資料9)。

(考察3)

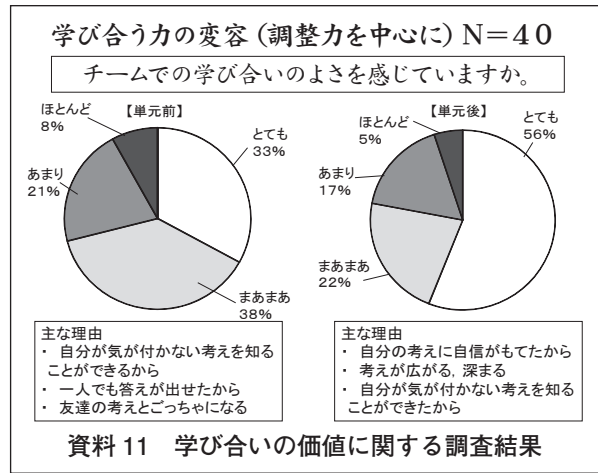
これからの自分と「交通」を視点にした社会とのかかわりを判断させる上で、「幻の循環線」の資料提示と、現在の交通機関の関係をもとに、「つくり出す活動Ⅲ」を設定したことが有効であったと考える。これは、与八郎の未来の福岡に対する思いや願いと現在の交通との関係に着目させたことが有効に働いたからである。資料9の「与八郎さんのおかげです。感謝して乗りたい」という記述は、与八郎の働きに恩恵を感じ、福岡の発展に誇りと愛情をもった姿である。

VI 全体考察

考察1, 2から、与八郎が循環線をつくった意味について、子供が、多様な視点をもつ友達との追究を通して、与八郎の福岡を発展させたいという願いと、「輸送」「交通の利便性」「地理的条件」などを関係付けてとらえる姿が見られた。また、考察3から、与八郎の働きを自分の生活と結び付けて、恩恵を感じ、福岡の発展に対する誇りや愛情をもった姿が読み取れる。資

わたしは、はじめ与八郎さんが田畑ばかりの福岡に、じゅんかん線をつくったのは、なぜかなと思いました。でも、資料で調べると、これまでのJR通線にない博多駅と港(はた)をつないでいたし、人口や商店の数もふえていたから、多くの人と品物運ぶためだと考えました。でも大橋くんが「のりかえ。かできるよになったのも、人を集めるくふうじゃないの。」と言ったので、自分の考えにつけかえて考え直すことができました。だから与八郎さんのじゅんかん線は、人やものを集めるくふうがあって、このことを福岡の発展につなげようとしたことがわかりました。わたしは、西鉄バスとか地下鉄とか使うけど、この学習で与八郎さんのおかげなんだなと思うようになりました。

資料10 A児の単元学習後の感想



資料10は、A児が書いた単元学習後の感想である。この感想から、A児が、「輸送」の視点から循環線と福岡の発展を関係付けて、多面的に考えたり、友達の判断をもとに自分の考えを再構成したり、与八郎の願いと行為を結び付け、循環線の意味を総合的にとらえた姿が読み取れる。さらに、与八郎の働きと自分の生活を結び付けて、恩恵を感じている姿までもが読み取れる。以上から、「つくり出す活動Ⅱ」の活動構成が有効に働いたと言える。

VII 成果と課題

資料11は、単元前と単元後に調査した子供の学び合いの価値の実感に関する結果である。単元前と単元後を比較すると、学び合いの価値に関して、単元前は、「とても」と感じている子供が33%であったのに対して、単元後は、68%とおおよそ2倍に増えている。その理由として、考えの広がりや深まり、自分の考えに対して自信がもてたことを挙げている。学級全体として、学び合いに価値を感じている姿が見られた。

以上のような実践をもとに、展開段階におけるつくり出す活動Ⅱの場面において、同質と異質のチームによる2つの交流活動を設定すると、地域社会に対する誇りや愛情をもって、社会的な判断を高める子供が育

つことが明らかになった。

課題としては、地域社会に誇りと愛情をもつ重点単元として、第4学年の先人の働きの学習では、教師の資料提示による「つくり出す活動」と小集団の編制を行いました。さらに、地域社会に誇りや愛情をもち、社会的な判断を高め合うために、伝統や文化を問口にした県の特徴の学習では、当事者に直接かかわることによるつくり出す活動や、子供の資料の求めに応じた小集団を編制することである。

(参考文献)

- 1) 小学校学習指導要領解説・社会編
文部科学省 2008年
- 2) 山口裕幸 チームワークの心理学
サイエンス社 2008年
- 3) 岩田一彦 社会科固有の授業理論・30の提言
明治図書 2001年
- 4) 北俊夫 なぜ子どもに社会科を学ばせるのか
文溪堂 2012年
- 5) 森分孝治 社会科授業構成の理論と方法
明治図書 1975年
- 6) 安野功 社会科授業が対話型になっていますか
明治図書 2005年